

2. 産卵親魚の保護と卵放流

ハマフエフキの漁獲量を月別にみると産卵盛期の4～5月に最も漁獲量が多い。これは産卵場周辺での産卵群を漁獲対象にしているためであり、これによりかなりの卵が有効に利用されずに減耗されている。このような資源の減耗を少なくするためには、産卵盛期の4～5月には産卵場での漁獲を禁止するか、または産卵親魚を一時蓄養し、産卵後に出荷するような体制の確立も必要であろう。このような蓄養施設を設置し受精卵放流を実施する水域としては、産卵場が近くにある知念岬の南側水域、糸満の沿岸水域が適地と思われる。

3. 種苗放流

ハマフエフキの種苗の人工孵化及び量産技術が確立されてなく、孵化率、歩留り等についての種苗生産試験研究の知見も全くなく、また標識放流試験も実施できない状態であり、放流種苗の安定期のサイズ、放流量等についての検討は種苗生産試験研究体制の確立と共になされなければならない。

九州西海域におけるマダイの種苗は全長30mm以上では80%の歩留りを示すことからこのサイズが種苗の安定期とみられており、ハマフエフキについてもほぼ同様なことがいえるのではないかと推測される。幼魚の着底初期の資料が得られず、放流時期についても明確ではないが、建干網等で漁獲された幼魚の体長組成等から逆算して30mm前後に達するのは4～5月と推定され、その期間が放流時期として好適と思われる。放流場所としては底質、藻場、餌料生物、天然幼魚の分布等、放流魚の歩留りを高めるような好適な生育環境を備えた水域を選定しなければならない。そのためには、保護造成等の漁場整備の施策がまずなされなければならない。

放流実施予定海域としては中城湾の湾奥部、金武湾の天願水域、北谷沿岸水域があげられる。

4. 若魚、親魚の保護と回収漁場の造成

ハマフエフキの若魚、親魚の分布範囲は、水深15m～80mで若魚は、15～30m親魚は、30～60mに主分布域を形成する。底質は砂泥、砂、砂礫、岩地帯である。このような漁場環境へ集魚させ効果的に回収するには滞留礁、産卵礁、並びに回収漁場として利用できるブロック魚礁等の大型の漁場造成が必要である。湾内には天然礁が各地に散在し1～3才魚の主要な生息場となっており、漁場造成にあたっては主として湾外の50～70m水域への大型魚礁、人工礁等の造成を考えるべきであろう。図-21に示したように大型魚礁(ブロック魚礁1.5m×1.5m×1.5m、500～1000個)が47年から継続的に投入されており、滞留礁、産卵礁としての効果が認められる水域もあり、これより大規模の漁場造成をより積極的に実施する必要がある。これらの実施水域としては中城湾内および湾外、金武湾口部、糸満南西沖合、北谷沖、羽地湾水域があげられる。

参 考 文 献

- 1) 相川広秋(1960)資源生物学
- 2) 新日本動物図鑑(1965)上中下

- 3) ニコルスキー (1965)、魚類生態学
- 4) 瀬川宗吉 (1966) 原色日本海藻図鑑
- 5) 沖縄の水産業1964~1972
- 6) 沖縄農林水産統計年報 (1971~1972)
- 7) 具志堅宗弘 (1972) 沖縄の魚
- 8) 沖縄県水産試験場 (1973~1974) 栽培漁業漁場資源生態調査報告書
- 9) パシフィック航業株式会社海洋調査部 (1974)、沖縄島 (金武湾、勝連湾) 漁場環境調査報告書